

地域のなかの松丘保養園の再発見： 生活誌・自然景観・身体経験を通して

白 石 壮一郎¹
澤 田 大 介²
木 村 直³
廣 瀬 俊 介⁴
田 原 範 子⁵
伊地知 紀 子⁶
岩 谷 洋 史⁷

はじめに

近代以降の日本国内のハンセン病政策においては、戦後早い時期に治療薬が導入されてからも隔離政策が継続して採られ、20世紀の終わりまで全国に13箇所ある国立療養所はそのための隔離施設として機能してきた。世界的には1950年代から隔離政策離れがすすんだなか、日本国内では2001年の熊本地裁原告側勝訴、すなわち隔離政策継続の違憲判決に至るまで、ハンセン病問題をめぐる当事者らの闘いの歴史は長きにわたったのである。

このようなハンセン病問題の歴史について、国立ハンセン病資料館（東京都東村山市）による国内でのハンセン病の歴史の編纂と普及・啓発活動はこれまで一定の成果をおさめてきた。一方で、各地域にある療養所における生きられた歴史、そのなかで暮らした人々の生活の記憶・記録を残し、編纂していく作業はまだ途上にあるといえる。

1 背景と目的

本研究プロジェクトは、資料館企画展示やフォーラムでの議論を通して、国立療養所松丘保養園（青森市石江）の記録と記憶を、将来の社会遺産として意味づけていく公的かつ学際的な議論の場を創ることが目的である。

その際、着目するのは「生活の場の記憶」である。日本国内のハンセン病政策という負の歴史の学習を目的とした場合、全国的な大きな運動の流れのなかで各療養所と入所者らはどうしても客体として描かれる傾向が強くなってしまう。一方、これらの大きな流れと並行して、長年にわたる園内の生活には個々人の形成したサークル活動や、各自が愛着と葛藤をもってすごした生活誌がある。では、こうした主体の生活誌のあり方には、どのようにアプローチできるだろうか。

第1に、文献資料からのアプローチがある。国内の各療養所には入所者自治会があり、各自治会が発行してきた機関誌の膨大なバックナンバーが存在する。1930年に創刊した松丘保養園の入所者自治会の機

¹ 弘前大学人文社会科学部 ² 松丘保養園社会交流会館 ³ 東京藝術大学大学院 ⁴ 風土形成事務所／東京大学 ⁵ 四天王寺大学
⁶ 大阪公立大学 ⁷ 姫路獨協大学

関誌『甲田の裾』[1930-2021 年、現在休刊中；通巻 705 号]には、入所者や働いた人びとの文芸作品が寄せられ、そこには青森市の気候や周囲の自然環境、折々の園内行事など生活の場の記憶、そしてハンセン病をめぐる動向に対する主体の動き・感情・ゆらぎなどがよく表現されている⁸。

第2に、入所者へのインタビュー聞き取りである。これは、従来の社会学のハンセン病療養所調査がおこなわれてきた手法である。ただし、入所者の年齢層が超高齢化するなか、COVID-19 パンデミック以降さらに直接インタビュー調査をする機会は得にくくなった。

第3は、かつての入所者・現入所者の方々が療養所生活のなかで残してきたさまざまなドキュメントや作品からのアプローチである。機関誌に寄せられた作品群とちがい、これらはかならずしも現時点までに整理され、収蔵されているわけではない。例えば、個人がとくに発表する予定なく作成した書簡や手記、手芸品、撮影された写真、園内での日用品を目指して作成された陶芸、サークルで絵の腕を磨いた人の習作群など。2000 年代中盤以降に各療養所に設置されていき、学芸員が配置された社会交流会館は、そうした各療養所の財産目録の作成・整理と展示という次世代への生活の記憶とその価値の継承の役割を期待される。

本研究プロジェクトは、文化人類学・社会学・芸術学・地誌景観論など学際的に、かつ、現場経験の豊富な松丘保養園学芸員をもメンバーにむかえ、これら3つのアプローチによる松丘保養園の生活の記憶の継承について、その可能性を総合的に検討しつつ具体的な方途を探っていくことを目指している。

Ⅱ-7

2 実 施 内 容

2023 / 2024 年度の2年計画で実施予定の本研究プロジェクトは、その成果発表の手段として、より市民にひろく共有されうる企画展示やフォーラムの開催、加えて研究成果として意味のある報告書の作成などを目論んでいる。

2023 年度は、9 月までの前半期でオンライン会議を数回重ね、研究プロジェクトのコンセプトの共有と、2023 年度の成果発表である弘前大学資料館企画展の企画内容について議論し検討した。後半期は、企画展準備と実施にほぼあてられた。メンバーの白石・田原・澤田は小堀宏康松丘保養園園長（医学博士）・葛西幸治同事務長と面談した。また、代表の白石は松丘保養園を訪れ出品作家の伯龍の作品を多数閲覧し、当人および澤田（学芸員）と意見交換をおこなった。並行して、それぞれ展示予定の木村の写真作品を東京造形大学（八王子市）で、廣瀬のスケッチ作品を風土設計事務所（栃木県益子町）でそれぞれ熟覧し、展示作品選定についての打合せをおこなった。

この結果、入所者の成瀬豊（絵画作品・故人）、伯龍（陶芸作品）、外部から本研究プロジェクトメンバーでもある木村直（写真作品）、廣瀬俊介（スケッチ作品）の4名の作品を展示し、田原範子、澤田大介、白石の3名がテキストパネルとテキストのハンドアウトの作成にあたるという企画展の基本線が決まっていた。展示については、来観者が現在の松丘保養園について、その地域風土を感じ（廣瀬のスケッチ作品）、コロナ期にあらためてあらわになった内外の境界を感じ（木村の写真作品）、松丘の生活誌を絵画表現から（成瀬作品）、また日用品としての陶芸作品に触れることによって（伯龍作品）感じるこのことができるものを目指した。

企画展は「ダイアログ | 松丘保養園と出会う」と題され（弘前大学資料館第33回企画展）、会期は2023 年 12 月 07 日から 2024 年 1 月 29 日となった。

この企画展の難しいところは、国立療養所やハンセン病問題について予備知識のない来館者にも展示についての理解を深めてもらうべく基礎的な知識をパネル表示することと、しかしとおりの啓発企

⁸ 代表の白石は過年度に、学部コース科目「社会調査実習」等において、松丘保養園の入所者自治会機関誌『甲田の裾』を対象とした共同調査をおこなった。これにともない同誌の詩歌作品および特集記事を中心に同園の生活世界について調査をおこなった。調査報告書に弘前大学人文社会科学部地域行動コース編 [2021、2022]。

画に終始するのではなく、松丘保養園に暮らした人たちひとりひとりの生活を想像してもらうこと、これら双方を両立させることだった。ていねいに教育的であろうとすればそれだけテキストパネルの枚数が増え、展示作品スペースを圧迫する。結果、企画コンセプトを冒頭のステイトメント1枚にまとめ、基礎知識のパネルについては最低限のもの1枚にとどめ、来館者には展示作品に集中してもらいながら、生活の記憶についてのテキストをハンドアウトで配布するという形式を採用した。

また、こうした企画展示を大学教育にも還元すべく、代表の白石の担当する教養科目「地域研究入門」において、企画展の観覧を事前課題として設定し、講義2回分を利用して演習をおこなった。まず、1回分を国内のハンセン病政策と国立療養所についての学習に充て（1月09日）、次にもう1回分を木村・伯龍・澤田をゲストに招いたアーティスト・トークで「社会問題へのアートからのアプローチ」「松丘保養園の将来」について考える機会を設けた（1月15日）。

3 意義・反響など

本研究プロジェクト（2023／2024年度）は、人文社会科学に軸足を置き、学外研究者・専門家との学際的な連携、および地域・市民社会への効果的アウトリーチをねらっている。こうしたプロジェクトは、地域未来創生センター研究プロジェクトというスキームがあってこそ可能だった。第1に、取り組み自体が実験的であるため、内容としてまだ外部資金を得るにはいたっていない萌芽的なものであり、これにたいする支援であったこと。第2に、学部研究経費では賄いきれない共同研究予算額を賄っていただいたこと。この2点をもって、本学部が中心となり学外との本共同研究ネットワークの構築が可能となった。

全国に13箇所存在する国立療養所は、いずれもすでに入所者の超高齢化時代に突入しており⁹、各施設・敷地の将来構想、および（「負の」）社会遺産としての記憶の継承などについては喫緊の課題となっている。こうした現状をかんがみても、青森市に立地する松丘保養園の現在について知見と考察を深めることを意図した企画展示が、同園社会交流会館との協働のもと、本学大学資料館で開催された意義は大きいと思う。歴史的な社会遺産の地域にとっての意味と価値を考えていくことは、ひとり当該施設だけでないうることでなければ、そうすべきことでもない。できるだけ多くのステイクホルダーや地域社会に議論をひろげてゆこうとするとき、人文社会科学的な知が貢献しうることがあるはずだ。

前項2.で述べた企画展の展示方法については議論が残る。最小限のテキストパネルで作品展示をおこない、ハンドアウトで部分的におぎなうという形式には賛否両論あるかもしれない。企画側が訴える「生活の記憶」とは結局なんなのか、それを伝える方法として、展示スペースのある壁面の使い方について、結局テキストパネルの掲示をやめ、空白として残したことの是非は審議未了であり、各方面からの批評が待たれるところである。

ともあれ、企画展示はそれなりの反響を得ている。会期開始後、年末年始を挟んでひと月経過した1月09日時点で企画展芳名録に記された来観者数は54人である。本学学部生・教員のほか、弘前市民、県内市外、県外からの来観者もある。松丘保養園のスタッフの方も訪れて、小さいながら充実した内容だった、松丘のふだん目にしない面をみたとの感想があったと伝え聞いている。1月25日には、松丘保養園からの企画展来館ツアーが組まれ、入所者の方5人と職員の方10人を、日比野センター長とともに迎え入れることができた。

企画展に関して、いくつかのメディア取材を受けた。新聞取材としては『陸奥新報』紙（2023年12月25日付掲載）および『河北新報』紙（2024年1月10日付掲載）から取材を受けた。テレビメディア取材としては、RAB青森放送制作部のドキュメンタリー番組の素材取材を受けた（放映日時未定）。また、

⁹ 松丘保養園のwebサイトによれば、2023年4月01日現在の同園入所者数は48名、平均年齢は88.9歳となっている。（https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/iryuu/hansen/matuoka/welcome.html 2024年1月09日閲覧）

web 版『美術手帖』誌の「有識者が選ぶ 2023 年の展覧会ベスト 3」（国際芸術センター青森学芸員 慶野結香 選）に選ばれた。

謝 辞

弘前大学資料館第 33 回企画展「ダイアログ | 松丘保養園と出会う」の実施にあたっては、大学資料館の浅田秀樹館長、附属図書館企画管理担当事務の木村智さん、資料館担当事務の山下滉大さんに展示や広報にともなう諸事についてつねに細やかに対応していただきました。また、同僚の葉山茂先生には日頃の立ち話のなかで、おりに触れて展示に関しての考え方のヒントをいただきました。

また、松丘保養園の伯龍さんには陶芸作品の出展を、故・成瀬豊さんの作品の管理者である一般財団法人松丘保養園松桜会には絵画作品の出展を、こころよく承諾していただきました。国立療養所松丘保養園（小堀宏康園長）および松丘保養園入所者自治会（佐藤勝会長）には、企画展趣旨についてご理解いただき、ご協力いただきました。

以上のみなさまに、心よりの感謝を申し上げます。

<参考文献>

社会調査実習しらかば班 編 [2021] 『短歌から読み解く療養所の生：機関誌『甲田の裾』と松丘保養園』、弘前大学人文社会科学部地域行動コース。

社会調査実習しらかば班 編 [2022] 『「不治の病」から「治す病気」へ：松丘保養園『甲田の裾』からみる療養者の「戦い』』、弘前大学人文社会科学部地域行動コース。



木村 直 「この松林は誰のためにあるのだろうか」より（国立療養所松丘保養園 撮影 M11 E-060）（2023年）



伯龍 「ご飯茶碗」（2001年）

「ダイアローグ」松丘保養園と出会う

会期 2023年12月7日（木）・2024年1月28日（月）

会場 弘前大学資料館 〒036-8500 青森県弘前市文京町一番地（弘前大学文京町地区キャンパス内）

時間 10:00 - 16:00（入館は15:30まで）休館日 日曜・祝日・休日 年末年始（12月28日・1月4日）

※都合により開館時間の変更、臨時閉館がございます。

出品作家

木村 直（アーティスト・写真家）

成瀬 豊（アーティスト・画家）

伯龍（アーティスト・陶芸家）

廣瀬 俊介（環境デザイナー）

テキスト執筆者

澤田 大介（学芸員）

白石 社一郎（文化人類学）

田原 範子（社会学）

主催 弘前大学資料館・弘前大学人文社会科学部地域未来創生センタープロジェクト「地域のなかの松丘保養園の再発見：生活誌・自然景観・身体経験を通して」

協力 国立療養所松丘保養園・松丘保養園入所者自治会・一般財団法人松丘保養園松桜会・ふきのとうの会

後援 JSPS科研費「ハンセン病療養所における生と再生—個人情報保護とアーカイブ化の可能性」（JP20K20737）

Ⅱ-7

地域のなかの松丘保養園の再発見…
生活誌・自然景観・身体経験を通して

Ⅱ.7

地域のなかの松丘保養園の再発見…
生活誌・自然景観・身体経験を通して

Ⅱ-7

地域のなかの松丘保養園の再発見…
生活誌・自然景観・身体経験を通して